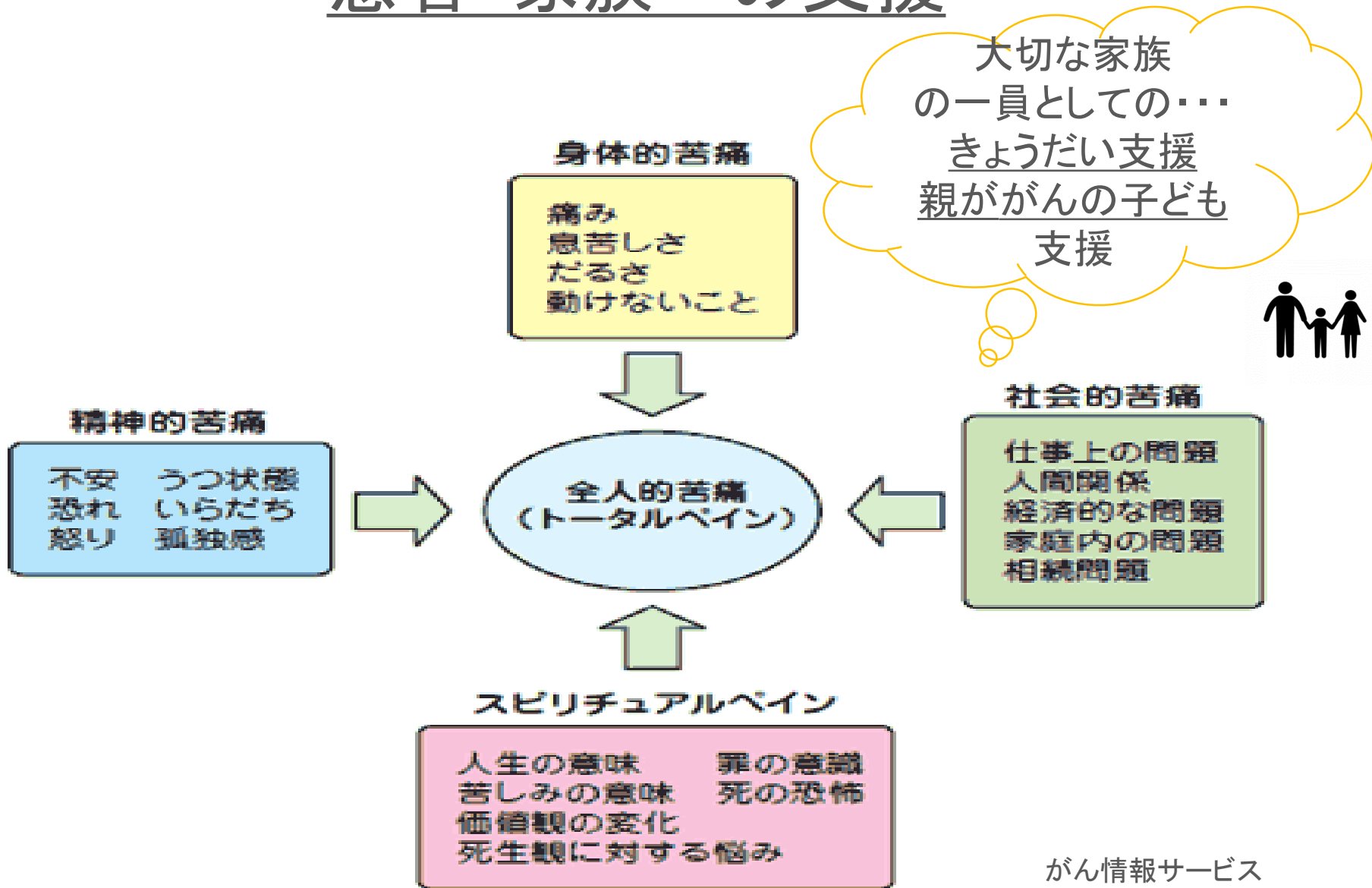


おきなわ小児看護研究会講演(名桜大学)
2021年7月6日

子どもと家族のトータルケア

国立がん研究センター中央病院
緩和医療科
Hospital Play Staff
小嶋リベカ

患者・家族への支援



がん教育の目標

※ 文部科学省(2015)は、「がん対策推進基本計画」に沿って、現在その普及に努めている

①がんについて
正しく理解することができるようにする

②健康と命の大切さについて
主体的に考えることができるようにする

○がん教育を実施した学校の割合：61.9%(2018年度)。
(内訳：小学校は56.3%、中学校は71.4%、高等学校は63.7%)

○実施方法：「体育・保健体育の授業」、「特別活動の授業」
「総合的な学習の時間」、「道徳の授業」、など。

がん教育の取り扱う内容

- ①がんとはどのような病気でしょうか？
- ②我が国におけるがん現状
- ③がんの経過と様々ながんの種類
- ④がんの予防
- ⑤がんの早期発見とがん検診
- ⑥がんの治療法
- ⑦がんの治療における緩和ケア
- ⑧がん患者の「生活の質」
- ⑨がん患者への理解と共生

調査結果：がん教育を受けた親ががんの子ども

NPO法人 Hope Treeの調査より抜粋(2020年)n=65

- ◆がん教育が役に立ったと回答したのは、
小学生約7割、中高生約4割
- ◆がん教育が必要と回答したのは、
小学生約8割、中高生約9割
- ◆授業中に親のことを考えたのは、
小学生約7割、中高生約9割

がん教育を受けた親ががんの子どもの声

NPO法人 Hope Treeの調査より抜粋(2020年)n=65

- ✓親ががんだということを授業の前後で配慮してほしい
- ✓予防に加え、がんになることが悪いのではなく、なってしまったとして、心身共に健康であるにはどうしたらいいかなどを伝えるべき
- ✓どんな病気かだけでなく、家族ががん患者になったら、どんなふうに生活が変わるかも教えるべきだと思う
- ✓生活習慣病が原因とだけ伝えてほしくない。「がんは生活習慣病」と授業で出たけど、お父さんはタバコもお酒もしないのにがんになっているし、ひとくりにしないでほしいです。また、「がんでも元気」とかいう人がCMに出てるけど、必ずしもそうじゃないので、「みんな違うんだ」ということをしっかり説明してくれる人に教えてほしいです
- ✓がんになった人の子どもたちの気持ちをもっと知ってほしい

り患に伴うゆらぎ

- Loss(喪失) : 自らの生活や人生において、
大切と思う何かを
奪われる、失う、手放す体験
- Grief(悲嘆) : Loss(喪失)に伴い生じる
心理面、身体面、情緒面に生じる反応

Loss (喪失)

人物(関係性)

死別、離別、
失恋、不和、
親子の役割喪失、

環境

学校、職場、心地よい場所、
生まれ育った土地、
生活様式

実存

目標や自己イメージ、
アイデンティティ、
理想や誇り

所有物

財産、能力、地位

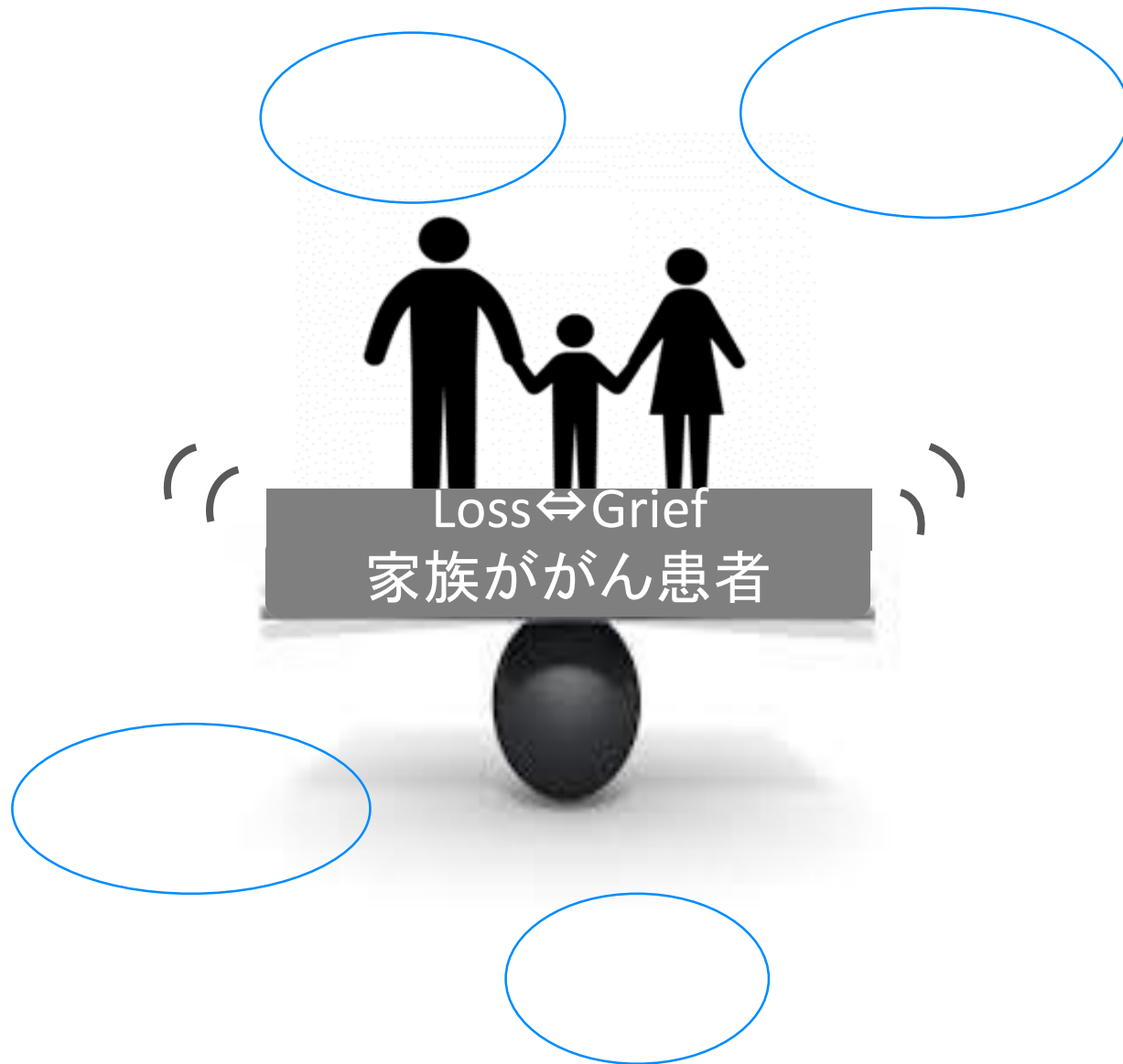
身体

手術や切断、
外見の変化、
身体機能の低下(体力)

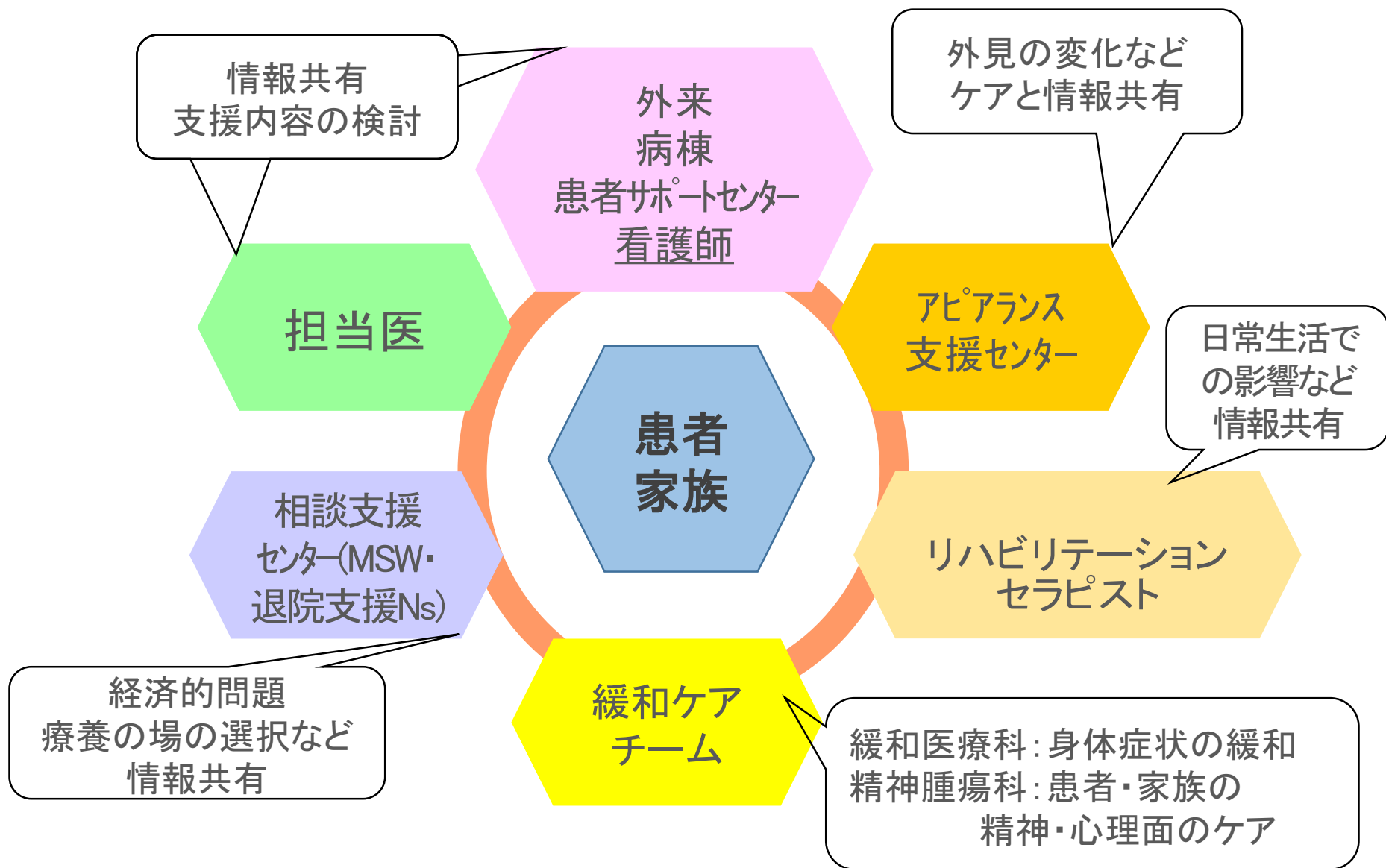
「目に見える(気づかれる)喪失」・「見えない(気づかれない)喪失」

坂口(2010)を元に作成

これまでのあたりまえが**変化する**



多職種との連携体制



NCCHで行われる子どもと家族への支援

①小児がん患者ときょうだいへの支援

2007年～：小児病棟にて子ども支援がスタート



子どもへの支援

プレパレーション

1. 遊びの提供
2. 安心して過ごせる環境を提供
3. 検査・処置中などの不安やストレスの軽減
4. 回復を促進し、麻酔や鎮痛剤を与える必要性の減少
5. ストレス状況に臨むための準備 など

保護者やきょうだい
支援

グリーフサポート

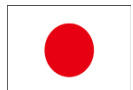
【参考】病院で「遊び」を通して家族をサポートする資格を有する専門職



米国: Child Life Specialist (日本の33施設で47人勤務。2020年9月時点)



英国: Hospital Play Specialist, Play Therapist



日本: 子ども療養支援士 (日本の16施設で勤務。2021年4月時点)

プレパレーション

➤ タイミング:

- ・幼児後期まで: 数日前。
- ・学童以上: 検査・処置が決まった時。



➤ 伝え方:

- ・養育者と相談→これまでの経緯に配慮→”本当”を語る。
- ・子どもの発達段階に応じて、視覚的に情報を伝える(人形、玩具、写真、絵本、医療器具などを使用)。
- ・検査や処置で何のために、何が身体に触れ、どんな感覚や音を体験するかも交えて具体的に説明する。
- ・○ or × を明確に伝える。子どもの協力を求める。

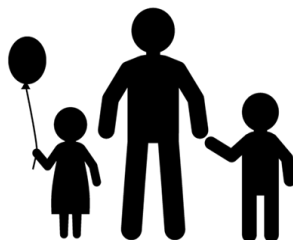
☆目をみて、ゆっくり語る。質問やどう理解したかを確認。

NCCHで行われる子どもと家族への支援

②親ががんの子どもへの支援

2012年～：緩和ケアチームが

子どもをもつがん患者・家族支援をスタート



当院における支援の実際



STEP1: 情報発信(院内掲示物・患者教室)

STEP2: 対象者の把握

- 入院患者20～50歳までカルテチェック
- AYA世代患者スクリーニングシート結果

STEP3: 対象者への声かけと気がかり確認
(冊子配布・個別面談案内)

STEP4: 患者・家族との個別面談



STEP5: 子どもへの直接支援



外来・病棟看護師

緩和ケアチーム

多職種カンファレンス

活動内容

病状変化に応じたニーズの拾い上げ

- ①病棟・外来での声かけ
- ②多職種間での情報共有

PC-Panda個別面談依頼

Parents with cancer and Children Support
-Professionals and associates
(**PC-Panda**)



主要メンバー

- ホスピタルプレイスタッフ1名
 - 緩和医療科医師1名
 - 精神腫瘍科医師1名
 - 心理療法士2名
 - 患者サポートセンター看護師1名
(がん看護専門看護師)
 - 緩和ケアチーム専従看護師3名
- ※必要に応じてソーシャルワーカーも参加

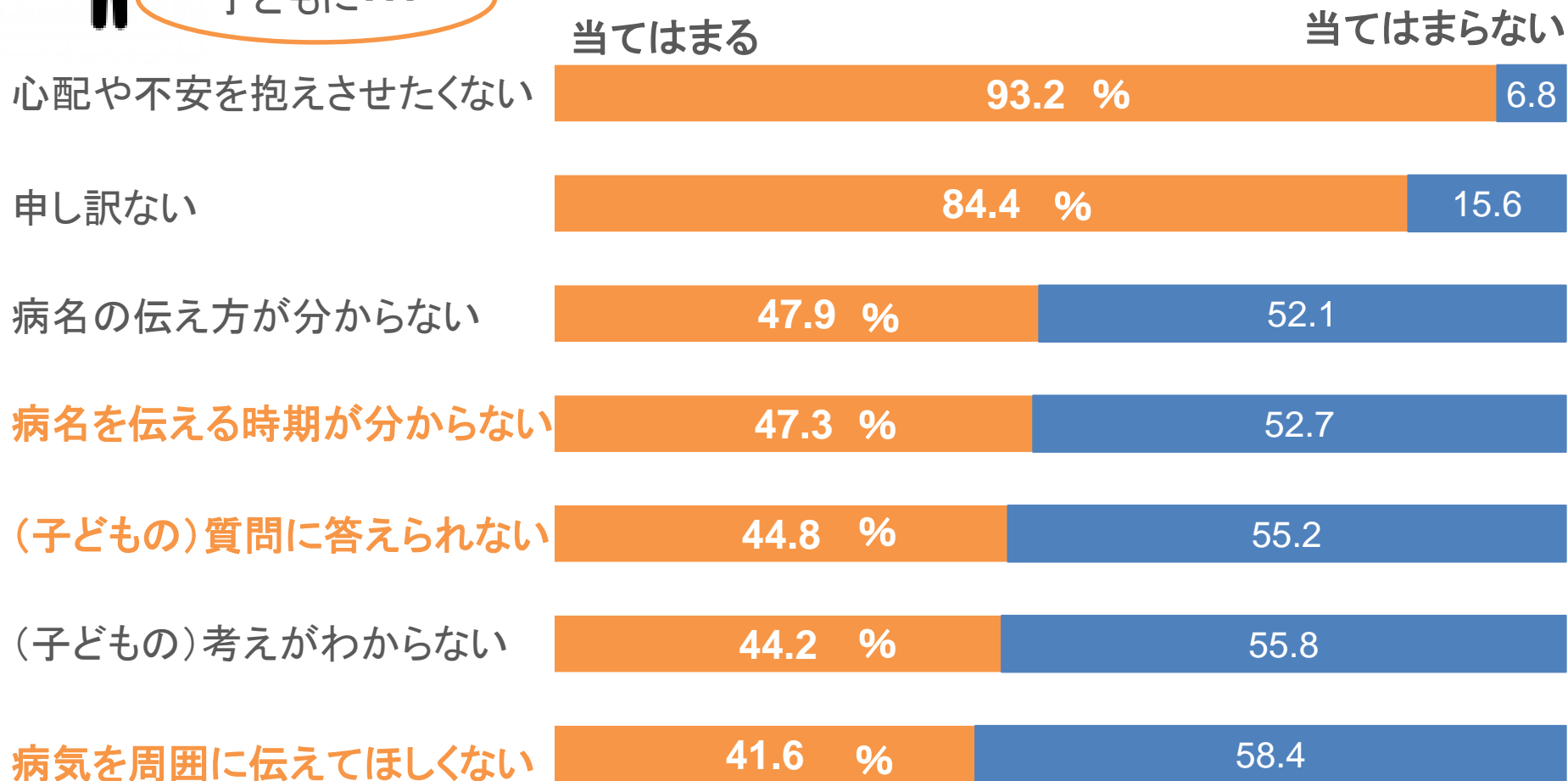
患者が子どもに対して抱える気がかり

(NCCH患者へのアンケート調査2018) n=152

小嶋リベカ JSPS KAKENHI Grant Number JP16K15949



子どもに...



未成年の子どもに病名と病状を伝えている

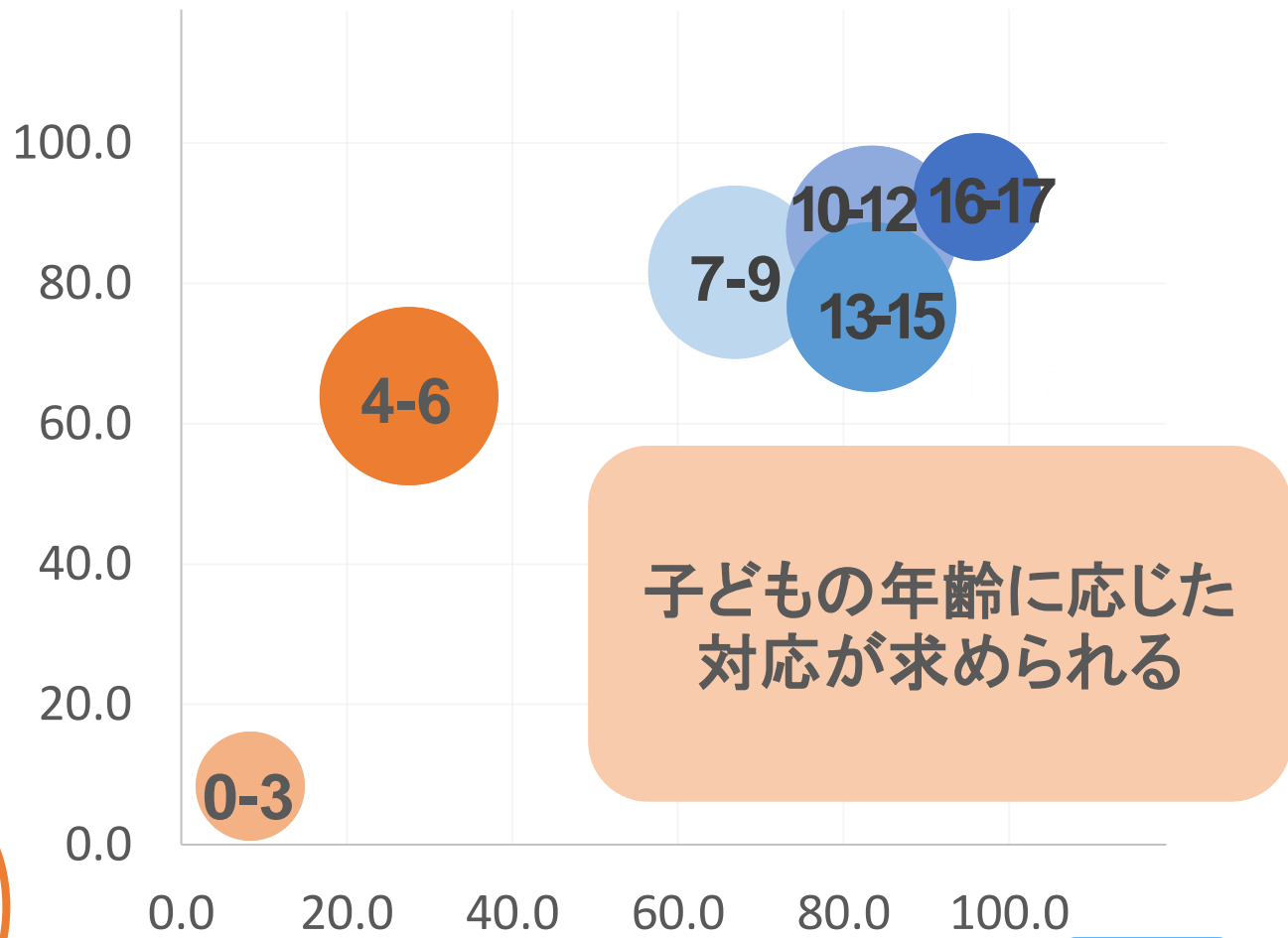
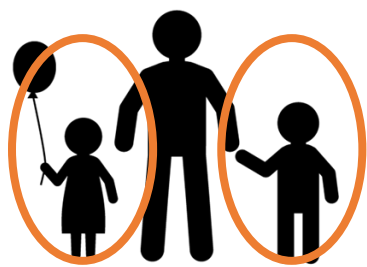
年齢区分別割合

小嶋リベカ JSPS KAKENHI Grant Number JP16K15949

n=237

病状を伝えている割合

73%
174人



子どもの年齢に応じた
対応が求められる

病名を伝えている割合

64%
152人

子どもにショックを与えたくありません



家族の一大事ですから、ショックは与えます。でも…
何も知らされずにいると、過剰な不安を抱えることがある

子どもにとって大切なことは

- ・ **現実**と**理解**の間にギャップが少ないこと
- ・ 家族の輪に存在し、出来事を共感・共有できること



子どもが自尊心を高め、新たな役割・対処方法を見つける

子どもと家族へのトータルケア

☆親と子が互いにだいに思い合う気持ちを支える。

☆家族の中に「ないしょ」を増やさない状況づくりを考える。

支援の基本

身を寄せすぎず支援する

- ① Active Listening 傾聴
- ② Assessment 必要としていること
- ③ Approach 現場で可能なこと

① Active Listening 傾聴

誠実に聴くこと

……聞いたままをかえし、
相手を肯定する

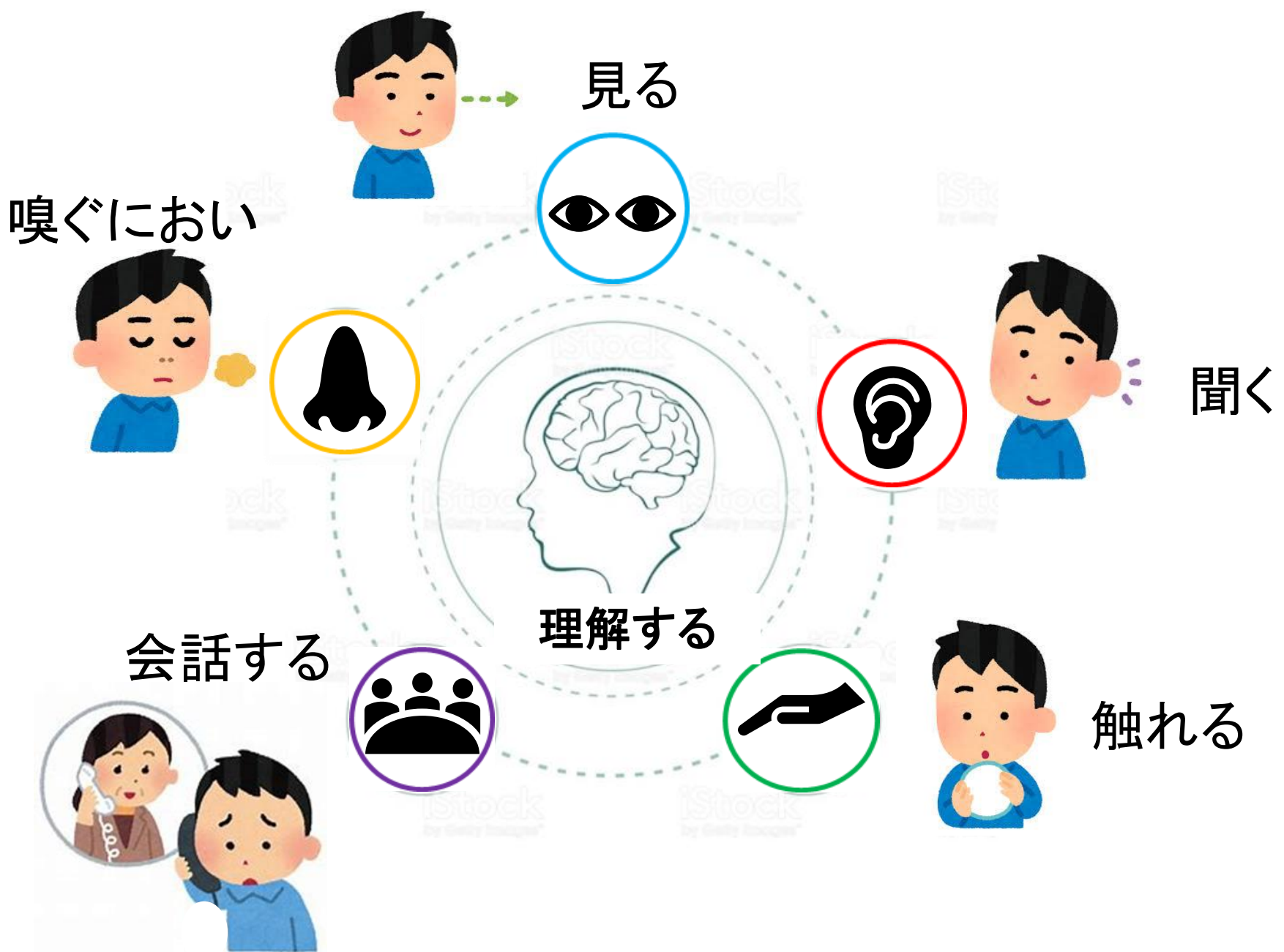
② Assessment 必要としていることの見極め

○ **し**つもんに答える → その時に言えることを伝える

○ **り**かい力^{りよく}を考慮 → 子どもの年齢に応じた内容で応じる

○ **た**イミングを選択して伝える → 治療段階やイベントを考慮
(容姿の変化があるときや親子の関わりに変化があるとき)

○ **い**つもどおり、を大切に → 子どもの日常の流れを保つ



5つの視点を規準に、子どものしつもん^{しつもん}に答える

りよく りかい力を考慮



～6歳位

- ・視覚的な変化に敏感。
- ・変化が起こる数日前に伝える
- ・**4つのC**を伝える
Cancer(風邪とは違う病気と理解する)
Not **catchy**
Not **caused**
Can help



～11歳位

- ・「死んじゃう?」「治らないの?」よく抱く問う。
- ・家族のルールに沿って、可能な役割を具体的に伝える
- ・**4つのC**を伝える
Cancer
Not **catchy**
Not **caused**
Can help



思春期

- ・伝えたことが理解できていないように見える
- ・症状の原因も理解したい
- ・「一人前」に扱う姿勢が必要である



高校生

- ・同年代の仲間関係を重んじる年齢のため、家庭内での反応が乏しく見える。
- ・大人同様に理解をしていきたい
- ・ネット上での正確な情報の取得方法を伝える必要がある

タイミング

診断時

初期治療

治療変更
の繰り返し

BSCへの
移行

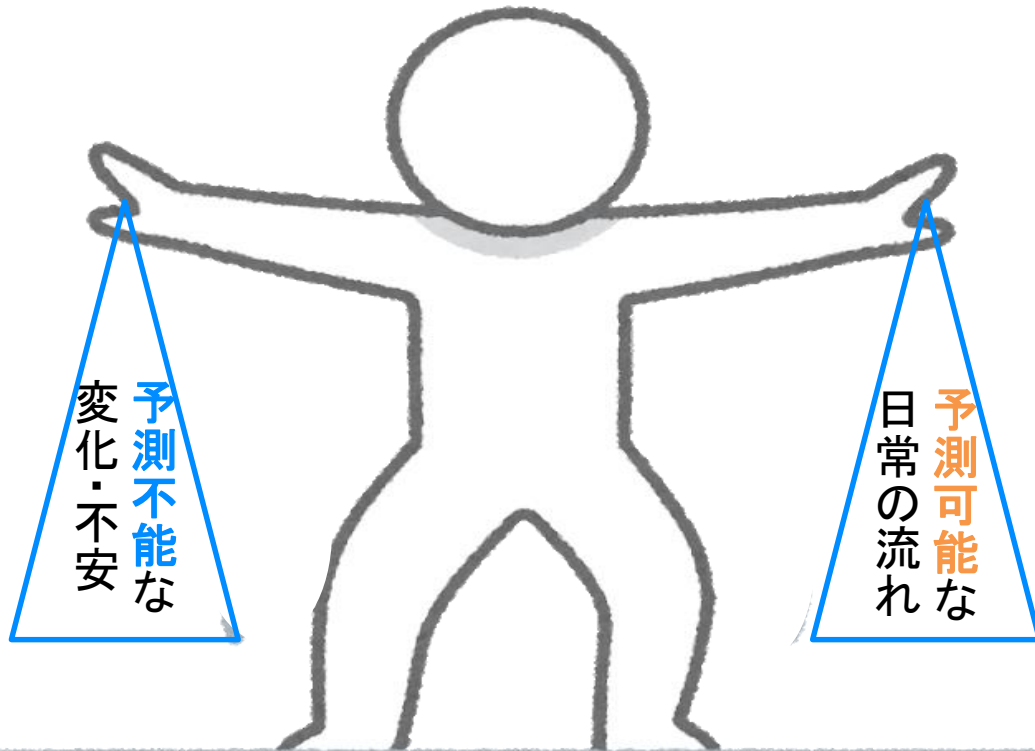
～変化がある時に伝える内容を考える～

患者の容姿/親子の生活習慣/子どもの反応/家族の役割

BSC:
Best Supportive Care

いつもどおり、を大切に

不安を抱えてバランスをとるために必要なこと



親の現状を知る(現実と理解のGAP少ない)
安心できる人が身近にいる
気持ちを表現できる手段がある

③ Approach 子どもと家族との寄り添い方～

ほどよいキヨリを保ち、
相手のペースに合わせて存在する
“伴走者”となる



医療者のセーフティーネット

- 相手への熱量が上がる要因を知る
 - ☆相手との共鳴点や関わる頻度の量、
 - ☆相手からの信頼やこちらの感情、役割の質
- 他者と状況を共有している
- 自分の揺らぐ気持ちに気づき、大切にできる
(労える)など



ありがとうございました

